



Title	アジアの課題と大学の知
Author(s)	大野, 光明
Citation	GLOBALブックレット. 2016, 18, p. 32-33
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/55588
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

2-1 アジアの課題と大学の知

大野光明 大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任助教

GLOCOLの国際協力グループでは、アジアの諸地域をフィールドとした研究・教育・実践をくみあわせた活動を行ってきました。本章はGLOCOL連続セミナー「大学とグローバル化」の一環として開催されたセミナー「アジアの課題と大学の知」をもとに、国際協力グループからの報告者3人による論考を掲載するものです。アジアが抱える諸課題に対して、大学の専門的知識や技術はどのように活用できるのでしょうか。また、どのようなプロセスや工夫によって、その知識や技術は現場で活用可能なものとなるのでしょうか。このような問いをたて、国際協力グループが大阪大学内外の機関とともにベトナム、モンゴル、バングラデシュで実施してきたプロジェクトを事例に、その成果、知見、そして明らかになった課題を整理し、考察したいと考え、セミナーは企画されました。

住村欣範はGLOCOLがAMEDおよびJICAから支援を受け実施している、ベトナムでのSATREPS(地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム)「薬剤耐性菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」の中間総括を行っています。思沁夫はりそなアジア・オセアニア財団からの支援を得て実施しているモンゴル・オンギー川流域における環境保護活動の意義とその射程についてまとめています。そして、小峯茂嗣はGLOCOLが大阪大学工学研究科ビジネスエンジニアリング専攻とともに実施している、バングラデシュでの農作業改善のためのモノづくり活動について、その試行錯誤の過程を報告しています。いずれの論考も、「アジアの課題と大学の知」をめぐる、(1)研究・教育・実践が絡まり合いながら進んでいく活動のダイナミズムの意義、(2)現地の住民や研究機関と大阪大学関係者との関係性の相互的な変容、(3)地域に根ざしつつ同時に国境を越えていく「協働」のありようについて積極的に評価している点が共通しています。

当日のセミナーでは3人のコメンテーターからコメントをいただいたあ

と、全体討論が行われました。多くの重要なコメントや意見、問題提起があったのですが、ここでは紙幅の関係上、今後の課題を含めた3点に絞りセミナーのふりかえりしたいと思います。

第1に、アジアの現場で起こっている諸課題を解決していくためには、分野横断的なアプローチとそのための体制構築が必要不可欠であることです。現場で起きている課題のメカニズムを解明し、適用可能な改善策を生み出すためには、たんに汎用可能な優れた技術が提供されるだけでなく、現地の経済的・社会的・文化的バックグラウンドを理解し、関係者間での適切なコミュニケーションをつくりだしていく多面的な知と実践が求められるということです。

第2に、「アジアの課題」と「大学の知」とのかかわりあい、単に「大学の知」をアジアの現場に適用させていく一方通行のものではありません。それは、現場へと向かった教員や大学院生、大学生がアジアの人々と地域から学び、影響を受け、そのプロセスのなかで知のあり方を創りかえていく、試行錯誤に満ちた双方向のプロセスであると思います。

そして、3点目として、このような試行錯誤を受け止めるための大学の制度や環境をあらためて考えなおす必要があります。アジアの地域が抱える課題のシビアさに向き合いながらも、短期的な視点だけでなく長期的な視点を持ち、「失敗」をも認め合うような余裕や余白を確保するための制度や環境、あるいは知的文化というものが必要であるという指摘がありました。大学「改革」のなかで、ますます短期的な成果主義が大学の制度・環境・文化に浸透している状況において、この指摘の重さはますます増しているのではないのでしょうか。

最後になりますが、本セミナーにご登壇いただきましたJICA・小西淳文シニア課題アドバイザー、りそなアジア・オセアニア財団・仁井裕幸専務理事、大阪大学・星野俊也副学長に心より感謝申し上げます。また、セミナー参加者の皆様にもあらためまして御礼申し上げます。ありがとうございました。